

小学校教員を目指す学生の気づきに関する研究

— 日英文比較教材の実践を通して —

Noticing by Undergraduates Intending to Be Elementary School Teachers: Through Practical Application of Teaching Materials for Cultural Comparison Between Japanese and English

坂本 南美 岡山理科大学

吉田 安曇 兵庫県立大学博士後期課程

Nami SAKAMOTO *Okayama University of Science*

Azumi YOSHIDA *Graduate School of Human Science and Environment, University of Hyogo*

Abstract

This study has two purposes. First, we examine the types of noticing by university students who are participating in Teaching Methods for Elementary English class as part of elementary school teaching course. Second, we attempt to investigate how our teaching materials for cultural comparison between Japanese and English helped those students develop their noticing. For these purposes, we conducted lessons using the materials and analyzed their description of language/cultural noticing based on three types: perceptive noticing, knowledge-based noticing, and context-based noticing. The results of the analysis tell us that students gradually experienced various noticing. In particular, some of them seemed to have become ready for spontaneous learning by completing the trials. We would like to suggest the effectiveness of providing these materials and show the possibility of contributing to the development of their teaching ability in the future.

1. はじめに

英語授業で児童に合わせた教材を英語で扱う授業実践力は、小学校教員に求められる重要な資質であり、教員養成課程の学生においても育成が目指されている課題である。2020年現在、小学校では、英語専科の教員が授業を行う学校も見られるが、まだまだ多くの学校では、学級担任が他教科と同様に英語授業も担当している現状が見られる。母語で行う他教科に対し、英語授業ではデジタル教科書

を用いたり、Assistant Language Teacher (ALT) とのティーム・ティーチングを実施したりしながら、英語による授業を展開している。ことばの教育という観点から見ると、国語授業も行う担任教員が英語授業も担当することで、国語との連携を図りながら英語教育を進めていくことが可能となる。ここでは、それぞれの言語的な特徴・相違点への気づきや理解を活かした外国語（英語）教育の実践が可能になると言えるだろう。母語の知識や理解を礎にしなが、教員も児童も、対象言語の特徴や両言語の面白さに気づくことができる。

昨今、言語教育における学習者の気づきに関する研究は、言語教育研究の重要な要素として注目を集めてきた (Byram, 1989; Schmidt, 1990, 1995; Fenner, 2001; Bergsleithner et al, 2013; Van Lier, 2014; Melo-Pfeifer, 2015)。Fenner (2001) は、学習者の文化的気づきと言語的気づきは相互に作用しており、外国語や外国文化だけでなく、自身の文化的・言語的能力や気づきへと立ち戻ることにもなり、学習者の自律性を高めると論じている。また、Schmidt (1990) は、第二言語習得における学習者の意識を分類し、気づきとしての意識を *perception, noticing, understanding* の段階に分けて説明した。学習者の気づきの重要性が広く論じられる中、実際に彼らの気づきを促す教材とはどのようなものか。学習者は、言語使用の場面でふと気づきを体験する場合もあるだろうし、英語を読みながら母語でどのように表現するのかと想像する中で気づく場面もあるだろう。気づきを引き出す教材の一つとして、対象言語と母語との比較を促す媒介物により、認知的な気づきを生起させる可能性もある。本研究は、小学校現場での活用を想定して作成した日英文比較教材を用いた活動を通して、教員養成段階にある学生がどのような気づきを経験しているのか、また、それらの気づきにはどのような変化が見られるか、その内容について検証することを目的とする。さらに、考察をもとに日英比較教材の有効性を検証する。

2. 教員養成課程における実践的英語力育成に向けて

2.1 小学校教員養成課程における英語教育の在り方

小学校では、2020年4月から3・4年生で外国語活動、5・6年生では英語科の授業が本格的に始まり (文部科学省, 2017)、移行期間の2年間も含めて、小学校の英語授業は担任教員または英語専科の教員が行っている (文部科学省, 2020)。小学校の英語教育のカリキュラムは、中学校のものとは差異がある。中学校では、文法項目を軸としたカリキュラムとなっており、文法シラバスのもとに授業や教科書が構成されているが、小学校では、英語使用の場面設定を軸とした場面シラバスであり、教科書は生活場面に基づく実践的な言語使用を目指した内容で構成されている。技能においては、3・4年生で2技能3領域、5・6年生では4技能5領域 (「聞く」「話す [発表]」「話す [やり取り]」「読む」「書く」) を総合的に取り入れて実践する授業展開となる (文部科学省, 2017)。

また、小学校では、全教科を担任教員が担当する学級担任制をとっているため、一人の教員が担任学級の英語授業だけでなく、国語や算数などほぼ全教科の授業を担当する。担任教員は、他教科については母語によって授業を進めるが、英語授業では、親しみやすい英語表現を用いながら授業を展開していく。これらを背景に、小学校教員の養成を目指す大学教育では、実際の教育現場で、英語授業をスムーズに進めていくために、学習の基盤となる英語の知識・技能と、授業に必要な実践的英語指導力の両輪を軸として、学生に英語の力をつけることを目指していく必要がある。これら2つの力を共に高めることによって、将来、教壇に立った時に、児童が実践的な英語に慣れ親しめる授業を展開することができるだろう。また、国語教育と連携しながら、母語を礎として児童の英語を運

用できる能力を高める視点を学生の中に育むことも重要である。

教育現場における英語授業での具体的な活動を見てみると、中学校や高等学校だけでなく、小学校でもsmall talkやteacher talkといった“talk”に関する活動は多様である。Small talkは英語による児童同士のやり取り、teacher talkは教師が会話のモデルや本時の内容に即して英語で導入する意味での“talk”を指す(村野井, 2006; 和泉, 2009; 文部科学省, 2017)。本時に学ぶ内容や場面設定で使用する英語表現を取り入れたteacher talkは、児童たちに自然な形で英語に触れさせる有効な活動の一つである。教員養成課程にある学生も、将来、教壇に立った時にteacher talk等の活動を有効に活用するための実践的な英語力は育成しておきたい力の一つである。そこでは、高度な英語力というよりは、むしろ児童の興味や思考に寄り添った英語表現を用いて、身の回りにあるものや日本で流行しているもの・事柄・事象などの素材を扱うことに慣れておく必要があるだろう。その中で、日本語による表現から、英語らしい言い回しや伝え方に変えて表現する力も求められてくる。これらの状況を背景に、本研究では、小学校の英語授業で実践的に英語を運用する力の育成を目指して、教員養成課程の学生を対象に、日本語と英語の言語的・文化的背景の差異への気づきを促す教育実践を試みる。そして、学生の日本語・英語の二つの言語・文化に対する気づきについて、Perceptive Noticing (知覚的気づき)、Knowledge-based Noticing (知識に基づく気づき)、Content-based Noticing (文脈に根差した気づき)の3つのタイプに分けて分析を行い、日英文比較教材の有効性について検証する。

2.2 理解へ向かう気づき

言語教育における言語や文化に対する気づきの効果について、第二言語習得の研究分野では、主に認知心理学の理論に基づいて論じられている。Schmidt (1990) は、「understanding (理解)」の段階まで学習者の意識が高まるためには「noticing (気づき)」が重要な役割を果たすと説明した。学習者による母語や外国語に対する言語的・文化的な気づきが生起する際には、それを引き出す媒介物や契機が必要であるだろう。例えば、母語と対象言語の比較を促す教材をもとに、自らの「noticing (気づきnoticing)」を言語化するという体験を重ねることは、両言語に対する認知的な意識が高まり、気づきをもとにした理解がより深まるのではないか。母語と対象言語との関係は、日本の外国語教育の文脈において文部科学省 (2016) が、『日本語と外国語の学習による言語能力の向上について (意見の概要)』の中で、「日本語と外国語を相対的に捉えることによって、その構造や語彙などの仕組み、それらが統合されて働くシステム、その背景となる文化など、日本語と外国語の違いに気づき、それぞれの理解を深めることができる」ことを指摘している。これは小・中・高等学校の学習者を想定した表記ではあるが、日本語と外国語を相対的に捉える点は、学生にとっても、言語の違いに対する気づきを通じた理解の深まりを促すことに繋がるのではないか。母語である日本語に対しては、日々、無意識に使用している言語であるがゆえに、日本語特有の表現・特徴や文化的背景にあらためて意識を向けることは少ないが、英語と母語を比較しながら両言語の特徴や文化の違いを意識的に読み取っていく過程では、何らかの気づきを体験することが期待できる。また、英語の力を育成すると同時に、日本語の能力も洗練させ、ことば(言語)自体に対する意識が高まっていくことも考えられるだろう。

学習者が目標言語に対する気づきを体験する際には、比較対象となる母語、それまでの学習で得てきた言語的知識、その言語使用の背景を慮ることで気づきが引き出された文脈、「何かが違う」といった直感的な感覚など様々な起因が考えられうる。それらが融合的に生起することで、学習者自身に

よる目標言語への包括的な理解へと繋がる。また、日本語と英語を比較しながら言語の特徴や違いについて気づいていくことは、メタ認知的に言語の習得過程に沿っていくものであると考えられる。本研究では、この気づき (noticing) の視点を高めるための学習活動や教材に着目しながら、学習者の気づきについて、それらが拠る要素をもとに、Perceptive Noticing (知覚的気づき)、Knowledge-based Noticing (知識に基づく気づき)、Content-based Noticing (文脈に根差した気づき) の3つのタイプに分類して理解する。Perceptive Noticing (知覚的な気づき) は、直感的なものも含めており、特に解説などは伴わず、気づいた点のシンプルなリスティングが当てはまる。「この点が違う」と感じたポイントを書き出したに留まるものも指す。Knowledge-based Noticing (知識に基づく気づき) は、学習者がこれまで学んできた英語の知識に紐づけた理解につなげ、学習者自身の言葉による解説も伴った気づきを指す。そして、Content-based Noticing (文脈に根差した気づき) は、言語的な側面のみに意識を向けたものよりも、むしろ文章の中の前後の脈略やその素材が含有する文化的・特徴的な背景知識等を踏まえた気づきを意味している。

言語学習の過程の中で学習者の気づきを見ると、それぞれが個々の英語学習プロセスの途中段階にあることから、学習者によって気づきの度合いや書きぶりが異なったり、主観的な解釈や文法等の取り間違いによる記述も見受けられたりする。本研究では、間違いの指摘よりもむしろ思考過程の高度化に焦点を当てたい。Vygotsky (1962) は、子どもの精神発達における高次精神機能は、精神間 (interpsychic) から精神内 (intrapsychic) へ転化するとした。彼は、子どもは他者との会話や社会的な状況としての精神間機能を、内化させ、自らへの問いかけや指示だしなどの精神内機能へ転化させることで、高次精神機能としての思考などを行うようになることを説明した。「内言」とは、心の中の発話を指す。この内言に対して、彼はコミュニケーションによる発話を「外言」と呼んでいるが、社会的な外言は内化されることで内言となり、それによって思考などの高次精神機能は発達すると説明している。彼の理論を踏まえると、学習者がこれまで英語の授業内で教員との社会的なやり取りによって導かれてきた学習を自分の中に内化させ、それを基にして自分自身への問いかけや指示だしなどの内言を行うことができたならば、学習者はその内言の経験を積み重ねることで、思考を深め、気づきに向かう意識を自ら高めていくことができるのではないか。内言は学習者にとって重要な役割を担う。つまり、理解や解釈を間違えることがありながらも、間違いを恐れずに学習者自身が自らの気づきを引き出す自己内発話を習慣づけていけるかどうかという点は、自立的学習者としての成長を促す重要な要素だと言える。その中で、自らの間違いに気づきながらも繰り返し学んでいくことが重要な習得過程だと言えるだろう。その作業を促す教育実践として日英文比較教材を用いて、教員養成段階にある学生の気づきを3つのタイプに分類しながら分析し、考察をもとに日英比較教材の有効性について検証する。

3. 研究方法

3.1 参加者と教材

本研究における教育実践は、教員養成課程で小学校教員を目指す大学2年生71名を対象に実施した。参加者は、2020年4月から8月まで春学期通期で行われた「初等英語科教育法」を受講しており、この科目は教員免許状取得のための必修科目である。日英文比較教材を用いた日英文分析の実践は、全15回の講義の中の2回目以降、4回にわたって実施した。実践初日となる第2回目の講義は、小学校

英語授業でteacher talkを授業ごとに取り入れる効果を解説し、実際にteacher talkを視聴した回である。日英文分析は毎授業の最後に帯活動という位置づけで実践した。日英文比較教材には指示文として、「まず日本語、次に英文を読み、日本語と英文の違いを見つけましょう。(表現や言い回しの違い、直訳されていないところなど) また、なぜそう思ったのかをグループで話し合しましょう。」と記しているが、この時期はCOVID-19の影響により、グループ活動は実施せずに個人の活動とした。学生は、その教材を読む中で気づいた違いを教材の中に記述していった。活動の流れを表1に示す。

表1 日英文比較教材の活動の流れ

活動内容	
①	講義の中で、大学教員が小学校でのteacher talkのヒントとなる内容を提示する。
②	講義後、課題として、学生は日本語と英文が対になって掲載されているハンドアウトを個人活動として読み深める。(ハンドアウトのトピックは、小学校の教室で取り上げやすく児童にとってなじみのある話題を取り上げている)
③	学生は、素材について書かれている日本語と英文を比較し、英語表現や日本語で言い回しの違いなど気づいた点をリストアップする。
④	リストアップした気づきについて、自分なりの解釈や説明を加える。

4回にわたり、異なる素材を用いた日英文比較教材による学生の気づきから、英語と日本語の言語の違いへの意識、文化的背景への気づき、特徴的な英語・日本語表現等への気づきの様子を検証した。本研究で学生が取り組んだ教材では、1回につき1つのトピック(素材)を取り上げている。左ページに日本語、右ページに英文で書かれた日英文分析素材の内容を表2に示す。

表2 日英文分析素材の内容

	実施年月日	トピック	日本文字数	英文語数	日英文の特徴
①	2020.05.06	名探偵コナン	437	202	・ナラティブ ・体言止めも使用
②	2020.05.22	ドラえもん	372	188	・説明文 ・具体的説明を多用
③	2020.05.29	ハリー・ポッター	591	215	・物語文 ・回想的描写
④	2020.06.05	清水寺	502	198	・解説文 ・事実説明

小学校教員を目指す学生の実践的な英語に対する教育的効果を図るために、本教材の素材の選定については、学生にとっても児童にとってもある程度の背景知識があるもの、認知度の高いもの、そして小学校で扱いやすいものといった点を考慮して作成した。また、あえてジャンルを限定せず、紹介文や文学作品、解説文等、実際の教育現場での使用を想定し、素材の多様性を重視した。その上で、学生の気づきの変化と共に教材ごとに見られる特徴的な気づきの内容についても検証する。

4. 実践の結果と考察

4種類の日英文比較教材に取り組んだ学生たちは、日本語と英文を比較し、気づいた点や発見した内容を書き留めていった。教材ごと学生の主な気づきの内容については表3にまとめる。本稿では紙幅の関係上、4つの教材のうち「ドラえもん」と「清水寺」に絞って考察を記す。

表3 学生の主な気づきの内容

トピック	気づきの種類	日本文	英文
名探偵コナン	対訳対比	取引を見るのに夢中になっていた俺は	Too busy focusing on the scene,
	主語の転換	俺はその男に毒薬を飲まされ	He gave me a poison.
	語彙選択	蘭の家に転がりこんだ	I started living with Ran's father,
	対訳対比	小さくなくても頭脳は同じ。	My body shrunk but my mind didn't.
ドラえもん	背景知識の違い	しばしばタヌキと間違えられる。	people often mistake him for a raccoon dog and he becomes angry
	対訳対比	のび太の身にふりかかった災難を一時的に解決する	he stores unexpected gadgets that improve his life.
	背景知識の違い	目的地を音声や思念などで入力した上で扉を開くと、その先が目的地になる「どこでもドア」	Anywhere Door, a pink-colored door that allows people to travel according to the thoughts of the person who turns the knob
ハリー・ポッター	強調	ハリーの唯一の親戚だった	Harry's only living relatives
	語彙選択	二人の癡の種だった	To their fury
	語彙選択	いまや戦々恐々だった	now lived in terror
	対訳対比	呪文集を取り上げられてしまったのはハリーにとって大問題だった	This separation from his spellbooks had been a real problem for Harry.
	語彙選択	宿題をどっさり出していた	a lot of holiday work.
	対訳対比	ハリーの一番の苦手、スネイプ先生	Harry's least favourite teacher, Professor Snape
清水寺	宗教観の違い	清水寺	Kiyomizu-dera is a Buddhist temple
	歴史的背景の違い	宝亀9年(778)年、修行僧賢心(後に延鎮と改名)が庵をむすんだのが清水寺の始まりであるという。	The temple was founded in 778 by a monk named Kenshin,
	文構造の違い	修学旅行でも多くの学生が訪れ	Kiyomizu-dera is also the popular destination of school trips

4.1 読者を意識した気づき：「ドラえもん」教材

2回目の教材の素材として取り上げた「ドラえもん」は、1969年にコミック連載が始まって以来、広く人気を誇っており、テレビ放送も長寿番組となっている国民的アニメである。また、多彩な映画シリーズも展開し、漫画本も映画版も様々な言語に訳されて世界中に読者がいる。長く視聴されてきた作品であるということがあり、現在の小学生だけでなく、初版が出された当時小学生だった教員側にも認知度が高く、英語授業の教室では、児童と教員が背景知識を共有した状態で、言語活動に取り入れたり、teacher talkの話題として取り上げたりしやすい素材と言える。この「ドラえもん」を説明する文章を読み、学生は気づいた日本語・英語の表現等の違いを書き留めていった。学生の主な気づきの内容は表4にまとめる。

Perceptive Noticing (知覚的気づき) は、日本文にある記述が英文でも訳語として含まれている、あるいは、含まれていないといった相違点へのシンプルな認知に相当する。多くの学生が、日本文では説明されていない情報が英文では語を補って含まれていることを指摘していた。例えば、「22世紀の未来からやってきたネコ型ロボット・ドラえもん」という日本語部分に対する英文「an earless robotic cat named Doraemon, who travels back in time from the 22nd century」における“earless”、また「目的地を音声や思念などで入力した上で扉を開くと、その先が目的地になるどこでもドア」に対する英語部分の「Anywhere Door, a pink-colored door that allows people to travel according to the thoughts of the person who turns the knob」に見られる“pink-colored”という語、また登場人物名の列挙等、学生が指摘した記述には

表4 ドラえもん：読者を意識した気づき

気づきの種類	内容
Perceptive Noticing	<ul style="list-style-type: none"> ・耳がない事は日本語訳に書かれていない。 ・日本語では「ドラえもん達」と表現されているが英文では登場人物の名前がひとりひとり書かれている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・秘密道具は固有名詞なのに翻訳されている。
Knowledge-based Noticing	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語ではある言葉を修飾する際、修飾文の方が前にくるのに対して、英文は修飾文がどんどん後ろに続くような構成になっている。 ・ドラえもんを関係代名詞を使って説明しているわけだが、ドラえもんはロボットなのにwhoを使っている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・「Back in time from」直訳すると「時をさかのぼる」となるが日本語では22世紀からやってきたとなっている。時をさかのぼるとやってくるには若干のニュアンスの違いがあると考え。 ・日本語「タヌキと間違えられる」英文「人々はタヌキと間違える」となっているように、日本語では受け身で表現されるところが、英文では三人称を主語として書かれることがある。
Content-based Noticing	<ul style="list-style-type: none"> ・英語版ではドラえもんは耳のないネコ型ロボットと紹介されていたが、日本語版には、耳がないという言葉がない。日本ではドラえもんに耳がないことは周知の事実のためこのような説明になっているのではないかと考える。 ・「しばしばタヌキと間違えられる」という文が英文では「often mistake him for a raccoon dog and he becomes angry」と訳されており、英文では日本語で示されていないドラえもんの気持ちまで表現されていることがわかる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・英文5行目ではis frequently bullied by his two classmates とあるが、ここではのび太がクラスのスネ夫とジャイアンにしばしばいじめられとうことを表しているとドラえもんを見た事がある人はわかるが、初めてこれを見る外国人には二人の人物の特定が難しいのではと考える。 ・英語では「最終的に解決しようとしていたことよりもさらなる困難を導く」という表現を日本語では「しっぺ返しを受ける」となっているように、日本語の方が表現の多様性を感じた。 ・英文はドラえもんという話を知らない人のために詳しくかかれている。smallやpinkなどを使って知らない人にもドラえもんの秘密道具がどんなものかを想像しやすいうようにしている。日本語文はある程度ドラえもんについての知識がある人のためにかかれている。

共通する特徴が見られた。これらは、日本語を読んだ学生が、英文を「直訳」であるという前提で見た時、英文では省かれている情報や、逆に理解を助けるために英文に付け加えられている表現に目にとまり、そこで生じた違和感から生じた認識であると言えるだろう。このような気づきは、内言する力を高めるための重要な最初の一步とも捉えることができ、明確な説明ができずとも、学生が確かに「気づき」を経験したことは、日英の相違をより深く理解する上で大きな意味があると言える。

次に、対訳としての認識のみならず、既習文法や自分の英語に関する知識など主観的な経験を基にした語彙・表現への気づきであるKnowledge-based Noticing（知識に基づく気づき）に着目する。これには日英の文法的ルールや文構造の違いへの指摘等が含まれる。例えば、ドラえもんは人間ではないため、使われる関係代名詞は“which”であろうという学生の中の前提が、“who”が使われた英文に触れることで、その語の選択に意識の焦点が当てられ、新たに経験する気づきとして学生の意識に留まっている。ここで“who”が使われている理由について、この学生による言及はないが、この学生の記述に見られる「ロボットなのに」という言葉に、自分の経験から認識している知識との実際の英語表現との相違点に戸惑いを感じていることや、“who”の使い方について自ら問いかけている様子が見て取れる。学生の経験的知識と実際の教材との違いに対する気づきは、これまでの知識と新しい情報・その表現が埋め込まれた文脈を総合的に捉え直しながら、学生自らが正しい理解へと向かうプロセスを生み出すとすることができるだろう。

最後に、Content-based Noticing（文脈に根差した気づき）において、学生自らが日英文の相違点に対する意味付けを行い、理解したことを整理して表現している記述を取り上げる。例えば、「『しばし

ばタヌキと間違えられる』という文が英文では『often mistake him for a raccoon dog and he becomes angry』と訳されており、英文では日本語で示されていないドラえものの気持ちまで表現されていることがわかる。」という学生の記述があるように、行間を読んだり背景を推測したりしながら読み進めた結果、英文の「ドラえもん」は馴染みの薄い外国人読者を意識している点など、気づいた内容に対する自らの理解に基づく解説がなされていた。また、なぜそう表現するのか、なぜそのような表現が英文ではより適切であるか、という点にも意識が及び、日本語や日本での背景知識も念頭に置きながら理解した内容を記述している。例えば、Perceptive Noticing（知覚的気づき）でも指摘があったドラえもんの耳について、Content-based Noticing（文脈に根差した気づき）では、読者の背景知識に注意しながら情報量を調整しつつ英文が構成されていることを理解し、自ら解説を加えている。

4.2 文化的背景を意識した気づき：「清水寺」教材

清水寺は、世界遺産に登録されており、京都の中でも観光者数1位の建造物として知られているが、その説明を英語で行う、もしくは英文による清水寺の解説文を目にしたことのある学生は、それほど多くはないかもしれない。今回使用した清水寺に関する日英文比較教材の作成については、日本人なら知っているであろう知識や歴史的な前提、また、あまり広く知られていない専門的知識の両方をバランスよく取り入れた。小学校の英語授業で扱われている教科書には、世界の多様な地域の有名な建造物やその土地の特産物などを取り上げているユニットも多いため、それらの内容を実践的に扱うヒントとなることも念頭に置きながら作成した教材である。清水寺の教材は、本研究で使用した他の教材のような物語文やナラティブの要素は薄く、むしろ解説文・紹介文として仕上がっている。

「清水寺」教材についての学生たちの主な気づきについては、表5にまとめている。

Perceptive Noticing（知覚的気づき）としては、文章数の違いや直訳としての英訳の相違点等のシンプルな指摘が見られた。例えば、「日本語では一文になっているところが英文では二文になっている。」「元禄7年から元治元年を、Edo periodと表現している。」といったものが挙がっており、彼らの記述の中には、それらに対する説明や解説は特には見当たらない。

それに対して、Knowledge-based Noticing（知識に基づく気づき）では、言語的なものだけでなく、歴史的・文化的観念に焦点を当てた気づきも含めて、自らの知識や主観的な経験を基にした気づきが記述されていた。例えば、年号と西暦の使い分けや長さの単位の違い、名詞が繰り返される際の代名詞への変換などの、個人的に持っている背景知識を踏まえた気づきである。また、既習の文法事項と照らし合わせ、時を表す副詞の位置は日英文では異なるという指摘も見られた。

Content-based Noticing（文脈に根差した気づき）では、小学生対象のteacher talkを意識した気づき、読み手の理解を助けるための英文の主語の統一などの指摘が見られた。また、「英語は多くの文化の違う人が見るからこそ丁寧に書かれていることに気づいた。」「全体的に英文は日本語より長く書かず日本語では一つの文を二つや三つに分けて文を書いている。英文は最初に大切な部分を表現するので、より短く簡潔に相手に伝えたいのだと考えた。」との学生の記述があるように、日英の文化的背景を意識したり、英語では重要な部分が先に述べられたりするという文構造の相違を理解し、自ら解説することができている。さらに、なぜ英文ではtempleに”Buddhist”が付け加えられているのかという疑問に対して、一旦立ち止まって自身に問いかけた上で、海外では宗教観がより強く根差しているのではないかという結論に至ったことが推測される。

表5 清水寺：文化的背景を意識した気づき

気づきの種類	内容
Perceptive Noticing	<ul style="list-style-type: none"> ・日本文では一文になっているところが英文では二文になっている。 ・「庵をむすんだ」が「was founded」＝「建てられた」と簡潔に表されている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・「元禄7年(1694年)から元治元年(1864年)の間」を英語では「During the Edo period」と省略された形になっている。 ・「多くの学生が修学旅行で訪れる」が「the popular destination of school trips」と表現されている。
Knowledge-based Noticing	<ul style="list-style-type: none"> ・宝亀9年や寛永などの元号は英語では表記できない。日本語独特の表現であるからと考える。 ・距離をフィートで書かれているため、一部の国にも対応した書き方になっている。 ・日本文では主語が省かれても意味が通じるが、英文では主語が省略されることがほとんどない。だが、英文で同じ主語が続く場合は、普通他の形に置き換えられる。例えば、2文目を見ても分かる通り、「Kiyumizu-dera」が「It」の形で表現されている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・日本文では途中で「毎年」などという「いつ」にあたいする内容がきても不自然ではないが、英文では最初か最後にこないと不自然に感じる。 ・英文では文のつながりがわかりやすいように日本文と文の順番が前後している。
Content-based Noticing	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で「～以前からの歴史を持つ」というのを英語で書くと分かりにくいので、小学生にとっても英語が苦手な人にとっても分かりやすく簡単な表現方法で書かれている。 ・寺院が「Buddhist temple(仏教徒のお寺)」となっているのは、海外ではキリスト教によっても宗派がわかれており宗教の分類に日本以上に興味があるため、はっきりと示していると考えた。
	<ul style="list-style-type: none"> ・英語は多くの文化の違う人が見るからこそ丁寧に書かれていることに気づいた。 ・日本文を見ると歴史を持つ京都では少ない寺院ということから、立派なすごい寺院なんだという印象を抱くが、英文だけ見ると平安初期に建てられた寺院なんだという印象しか残らないと感じた。表現の違いだなと感じた。
	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に英文は日本文より長く書かず日本語では一つの文を二つや三つに分けて文を書いている。英文は最初に大切な部分を表現するので、より短く簡潔に相手に伝えたいのだと考えた。 ・日本文では、主語や目的語が省略されていたり、主語が変わったりすることがよくあるが、英文の第1段落を見てみると、ほとんどの文が清水寺を主語として文章が書かれている。日本文に比べて、主語が統一されていることでその主語とそれぞれの出来事や時代、人などとの関係性が分かりやすい。

4.3 包括的な視点による学習者の意識の変化

最後に、今回実施した4つの課題を通して、特に自発的かつ包括的な気づきを体験した学生の一人(学生Aとする)に焦点を当て、教材ごとの気づきを時系列で捉えて表6にまとめる。なお、気づきについては、その種類の頭文字と番号で特定して表記する。(例:P-①、K-②、C-③)

2020年5月6日に行った第1回日英文比較教材では、素材として「名探偵コナン」を扱った。この時に学生Aの気づきとしての意識を見ると、まず「私」と訳されることの多い「I」が「俺」と訳されているように、対訳は常に一つではないことを認知し(P-①)、「I」の性別など、想像力を働かせながら読み進めていくことの必要性に気づいている(K-②)。K-③の内容もKnowledge-based Noticingであるが、「ここからは表現・言い回しの違いを見ていきます」とあるように、表現の多様性に注目して、より適切な日本語の選択について記述している。この表現には、経験的に「表現・言い回しの違い」があることを前提として、それらに焦点を当てながら自らの気づきを捉えていこうとする姿勢で臨んでいる様子が見て取れる。しかし、第1回目の教材「名探偵コナン」では、Content-based Noticing

表6 気づきに伴う学生Aの記述内容

トピック	気づきの種類	気づきの内容
名探偵 コナン	Perceptive Noticing	P-①:冒頭の「I」が「俺」となっています。 K-②:主人公が男性なのか女性なのか英文を読むときは後から探ります。
	Knowledge- based Noticing	K-③:ここからは表現・言い回しの違いを見ていきます。(中略)「忙しい」が「夢中になる」に変わっています。これは、その場面に応じて「忙しい」よりも適切な日本語を選んでいることがよくわかります。
	Content-based Noticing	該当なし
ドラえもん	Perceptive Noticing	P-①:冒頭のthe storyは直訳で、「物語」となりますが、ここでは「本作」となっています。
	Knowledge- based Noticing	K-②:単語の表現の違いをもっと見ていきましょう。(中略)「Bamboo-Copter」「Anywhere Door」と2つの単語が結びついてしっかり英語化されていることがわかります。日本独自の物事はローマ字表記となりますが、英語で訳せる場合は英語になっているなど改めて感じました。
	Content-based Noticing	C-③:「store」は名詞で「店」であり動詞で「保管する・保存する」という2つの意味があります。このことから日本語にはなかなかありませんが、英語には同じ言葉でも様々な意味を持つものが非常に多いため、文の中で本当の意味・解釈を捉える必要があるなど改めて気が付きました。
ハリー・ ポッター	Perceptive Noticing	P-①:ベチュニアおばさん、バーンおじさん、スネイプ先生を「Aunt Petunia and Uncle Vernon」「Professor Snape」と表現している。
	Knowledge- based Noticing	K-②:説明が長い場合は後ろから訳されるのが英語の特徴です。しかし、このように後ろか前か確定的に決まりきってはいないので翻訳する時は特に日本語と違い注意すべき事項だと思いました。 K-③「least favourite teacher」という表現は「最も嫌い・苦手な先生」という日本語訳になりますが、日本語ではこのように「嫌い」「先生」が組み合わせられてきています。
	Content-based Noticing	C-④:英語では、「否定(～ではない)」「好き」「先生」という組み合わせで成り立っていることがわかります。「嫌い」が「好き+ではない」になっていることが一番の特徴です。 C-⑤:「unsuccessful」も「successful」に「un」がついて否定を意味しています。言い回しの違いも本当に多いですが、表現や表記自体の違いも多様であるなど改めて感じました。
清水寺	Perceptive Noticing	P-①:「一つ目に、二つ目に、三つ目に」を英語では「one, two, three」ではなく「first, second, third」が多いです。
	Knowledge- based Noticing	K-②:英語は聞き慣れない単語や省略語句の説明をすぐ後ろで行っていることが多いように感じられます。 C-③:この章での圧倒的な違いが一つあります。それは、「dera」と「temple」という2種類の表記があることです。同じ「寺」という意味ですが、「Kiyomizu- temple」と表記しないのは、清水寺を一つの日本の文化財であることを細かに伝えているからだと考えられます。というのも、キヨミズテンプルで覚えてはしれないからではないかと感じられます。
	Content-based Noticing	C-④:「one」には「1」「(文中のもの)」という意味もあり翻訳時に誤った解釈になりやすいので注意したいのですが、これは日本語と同様、文章で解釈・理解することでもあるのでこれは一つの共通点だと思いました。単語の並び、言い回し、表記は違えど、英語の訳し方のコツさえつかめば、自分なりの良い日本語訳を作れるのではないかと改めて思いました。まずは、聞き慣れている簡単な単語の文章で挑戦してみるのが良いと感じられました。

に相当する気づきは見られなかった。

続いて、2020年5月22日に実施した「ドラえもん」での学生Aの記述を見ると、P-①でも、「story」という英単語に対する日本語訳を予想とは違う日本語（「本作」）として認知している（Perceptive Noticing）。第1回目の「名探偵コナン」の時と同様に、「単語の表現の違いをもっと見ていきましょう。」と前置きを加え、自らの学習経験から、単語の表現には違いがあり、多様であることを前提として、その点に着目することを宣言して読み進め、気づいた点としてローマ字表記と英訳の違いを挙

げている (K-②: Knowledge-based Noticing)。その例として「タケコプター」「どこでもドア」は「Bamboo-Copter」「Anywhere Door」と訳した方が、英文読者にとって理解しやすいのではないかと思考を膨らませ、「英語で訳せる場合は英語になっているなど改めて感じました」と「改めて」という言葉を用いて、自分の知識を基にしながらも新たな気づきを体験した様子を記述している。また、「ドラえもん」素材ではContent-based Noticingに相当する記述が見られる。C-③では、「store」という英単語には、名詞と動詞の2つの意味があり、それが日本人の理解を困難にしていることを指摘した上で、「英語には同じ言葉でも様々な意味を持つものが非常に多いため、文の中で本当の意味・解釈を捉える必要があるなど改めて気が付きました」とし、ここでも自らの知識をもとにしながらか「改めて」気づいた英単語に対する日本語の対訳の多様性を説明している。

2020年5月29日に実施した「ハリー・ポッター」素材の日英文比較において、P-①では英語と日本語の語順の違いを認知しているが (Perceptive Noticing)、K-② (Knowledge-based Noticing) では、「説明が長い場合は後ろから訳されるのが英語の特徴です。しかし、このように後ろか前か確定的に決まりきってはいないので翻訳する時は特に日本語と違い注意すべき事項だと思いました。」とあるように、語順によって意味が変わりうるという注意喚起へと変化してきている。K-③ (Knowledge-based Noticing) では、「least favourite teacher」を訳す上で、自らの経験から導き出される日本文とは異なる英語表現に気づき、「日本語ではこのように『嫌い』『先生』が組み合わせられてきています。」とあるように、日本語・英語のそれぞれの言語において、より適切な語の組み合わせがなされていることへの気づきが見られる。さらに、C-④・⑤ (Content-based Noticing) では、表現の多様性を再認識し、「unsuccessful」「least favourite teacher」といった語の選択、あるいは語順に明確な解説を加え、自らの気づきに対する理解を説明している。このように、回数を経るごとに、徐々に教材の見方が多様化し、各語への意識も洗練され、学生Aが自身の学びを自ら発展させ、意識的により深い気づきを体験している様子が伺われる。

最後に、2020年6月5日に実施した「清水寺」に対する学生Aの記述を見てみると、P-① (Perceptive Noticing) では、英単語の対訳に対する気づきが見られるが、K-② (Knowledge-based Noticing) では、「単語や省略語句の説明をすぐ後ろで行っていることが多いように感じられます」という表現から分かるように、英語の語順に焦点を当てて、英文中の複数の箇所、特定の語の説明の際にはその語句の後ろに説明部分を置くという形が取られていることに気づいたことが伺われる。また、C-③ (Content-based Noticing) では、文化的背景を意識しながら、より深い気づきを体験しており、その気づきから生じた理解を添えて「Kiyomizu-dera」という単語を通して自らが感じ取ったキヨミズテンプルで覚えてほしくないという作者の意図を説明している。最後のC-④ (Content-based Noticing) では、日英文比較教材を通して経験した気づきを基に、この教材を通した総括的な振り返りを記述し、「コツさえつかめば、自分なりのよい日本語訳を作れるのではないかと改めて思いました」と自らがoutputしていく準備も整ってきた実感を述べている。ここでは、新たな気づきに基づいて、実際に英作文に挑戦してみたいという決意も表明している。本研究で使用した教材が学生Aと英語を繋ぐ媒介物となり、母語を礎とした学生の言語的・文化的気づきを促したことが伺える。その結果、自らの気づきを言語化するという作業を通して、母語と対象言語の両言語に対する認知的な理解がより深まり、自身の内在的な学びへと発展させていった過程を見て取ることができる。学生が教材と向き合い、自己に問いかけたり、自らの知識との紐づけを繰り返したりすることで、気づきの幅が広がっていった

様子が確認され、本教材の教育的効果が一定程度認められたと言えよう。

5. 今後に向けて

本稿では、小学校教員を目指す大学生を対象に、母語を礎とした外国語への気づきを促す教育実践を通し、両言語の比較による彼らの気づきをPerceptive Noticing（知覚的気づき）、Knowledge-based Noticing（知識に基づく気づき）、Content-based Noticing（文脈に根差した気づき）の3つのタイプに分類して検証した。その結果、小学校英語授業で扱うことのできる題材を厳選して帯活動として実践する中で、学生によって様々なタイプの気づきを経験していること、また英語教材の内容について自らに問いかけながら気づきを促す思考が発展的に変化していることも見えてきた。その点では、日英文比較教材が学生の気づきへの意識を高めるにあたって、ある程度の効果を奏していたと捉えることができるだろう。今後は、教材の精度を上げるとともに、より長期的な実践を通して、学生の気づきを実践力へと繋げる教育実践とその有効性について調査したい。日英文比較教材の実践は、ことばとしての日本語と英語をより明確に意識する媒介となっていることが予想されるため、両言語の読解力の関連についても探求していく必要があると言えるだろう。

引用文献

- 和泉伸一 (2009). 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』 東京：大修館書店。
ヴィゴツキー (1962). 『思考と言語 上』 (柴田義松訳) 明治図書出版。
村野井仁 (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 東京：大修館書店。
文部科学省 (2016). 『日本語と外国語の学習による言語能力の向上について(意見の概要)』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryo/attach/1367877.htm
文部科学省 (2017). 『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』
文部科学省 (2020). 『平成30年度 英語教育実施状況調査(小学校)の結果』
https://www.mext.go.jp/content/20200710-mxt_kyoiku01-100000661_3.pdf
Bergsleithner, J., Frota, S., & Yoshioka, J. (2013). Noticing and Second Language Acquisition: Studies in Honor of Richard Schmidt. National Foreign Language Resource Center at University of Hawaii. Honolulu, HI.
Byram, M. (1989). *Cultural studies in foreign language education* (Vol. 46). Multilingual Matters.
Fenner, A. (2001). *Cultural awareness and language awareness based on dialogic interaction with texts in foreign language learning*. Council of Europe.
Melo-Pfeifer, S. (2015). Multilingual awareness and heritage language education: children's multimodal representations of their multilingualism. *Language Awareness, 24*(3), 197-215.
Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics, 11*, 129-158.
Schmidt, R. (1995). Consciousness and foreign language learning: A tutorial on the role of attention and awareness in learning. *Attention and awareness in foreign language learning, 9*, 1-63.
Van Lier, L. (2014). *Interaction in the language curriculum: Awareness, autonomy and authenticity*. Routledge.